

# FinTechを加速する 共通APIというアプローチ



## 「APIバンキングによるFinTech共通戦略」から

9月20日と21日の両日にわたって、金融庁と日本経済新聞社の共催による「FinSum:Fintech Summit」が開催された。テーマは「BEYOND BORDERS—境界を越えて」。FinTechの現状と今後、金融機関とFinTech企業の協業における将来像などが話し合われた。2日目には「APIバンキングによるFinTech共創戦略」というテーマのパネルディスカッションも行われた。ここではその様子をお伝えする。

### パネリスト ご紹介



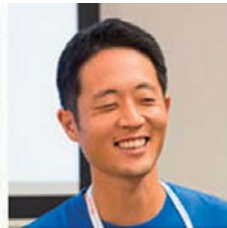
蓑輪 圭樹

日本アイ・ビー・エム株式会社  
常務執行役員



マーク マクダッド 氏

マネーツリー株式会社  
常務取締役  
営業本部長



尾形 将行 氏

free株式会社  
執行役員  
事業開発部長



閑歳 孝子 氏

株式会社Zaim  
代表取締役



二上 哲也

日本アイ・ビー・エム株式会社  
技術理事



日本アイ・ビー・エム株式会社  
常務執行役員  
蓑輪 圭樹

冒頭、ディスカッションのモデレーターを務める日本IBM常務執行役員の蓑輪圭樹は、車両を保有しない世界最大のタクシー会社「Uber」や物件を持っていない世界最大の宿泊サービス「Airbnb」などを紹介し、「業界のルールや規制に縛られずに、お客様に最適なサービスを提供する時代が来ています」と変化を指摘した。

この変化の背景にあるのは増大するデータの存在だ。それはIoTによってさらに急増していく。蓑輪は「業界を越えてデータがつながり、商品やサービスと提供者を組み合わせるリバンドリングによって、顧客ニーズを中心とした新しいサービスが生まれています。金融業界では、それがFinTechです。」とデジタル時代の金融ビジネスにおけるFinTechの役割を語った。(図1)

今後リバンドリングによって生まれると想定される一連の新しいサービスは、一社単独で提供できるものではない。外部との連携が必要になる。「そこでIBMではAPIをインフラとして共通化、オープン化することが重要になると考えています」と蓑輪は、APIによって業界を越えてつながり、FinTechが広がっていくAPIエコノミーの考え方を提示した。(図2)

金融機関と異業種がつながることで、どんなサービスが考えられ、そこにはどういう課題があるのだろうか。蓑輪氏の話に引き続いて、FinTech企業をパネラーに迎えてパネルディスカッションが行われた。

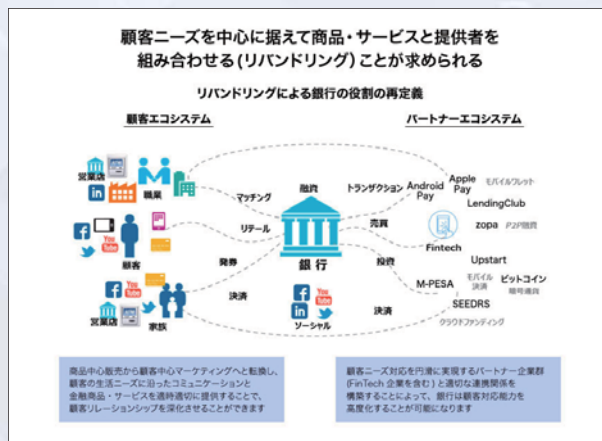


図1 リバンドリングによって銀行の役割が変わる

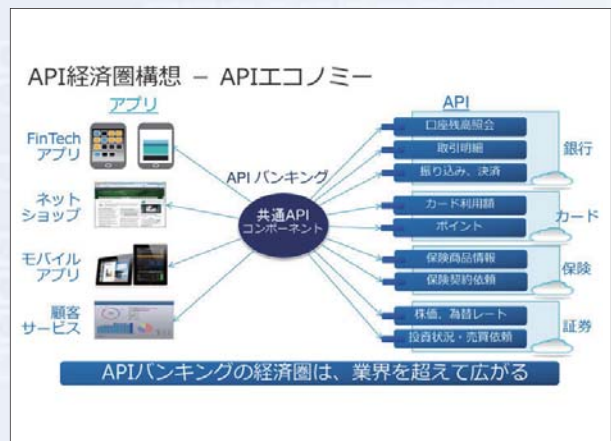
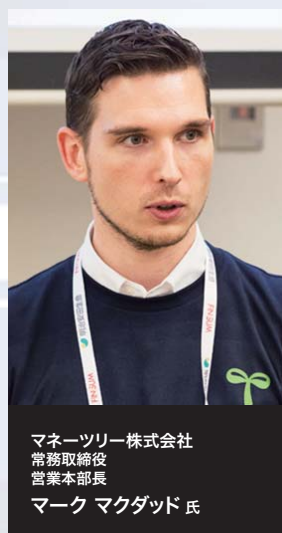


図2 FinTechによるAPIエコノミーの考え方

## FinTech企業との共創はどんなメリットを生むのか



まず銀行とFinTech企業がつながることで、どんなメリットが考えられるのか。「双方にメリットがある」と語るのは個人の取引明細をひとつにまとめるプラットフォーム「MT LINK」を提供するマネーツリーのマークマクダッド氏だ。FinTech企業は銀行の持つ情報を参照したいし、銀行側はFinTech企業のデータからユーザーの行動特性をより深く理解できる。

(図3)



図3 マネーツリーが提供するプラットフォーム「MT LINK」

クラウド会計ソフト「freee」を提供する尾形将行氏も同様のメリットを指摘しつつ、「Fintech企業が提供できるのはユーザーが求めるUXであり、今、ユーザーに求められている使いやすく、面白いサービスを提供するという意味でもメリットは大きい」と話す。金融機関がシステムを変更するのは大変だが、FinTech企業であればスピーディーに対応できる。結果として、



図4 クラウド会計ソフト「freee」による金融機関との連携

Fintech企業のサービスを入り口にして銀行のネットバンキングのユーザー増にもつながる。また双方で提供するサービスのデータが蓄積すれば、そこからまた新しいサービスを生み出すことができる。同社では財務会計データ以外のデータから柔軟に対応できる融資サービスの開発にも取り組んでいるという。





またオンライン家計簿サービス「Zaim」を提供する株式会社Zaimの閑歳孝子氏は「スマホで利用できるFinTechのサービスが登場したことで、金融サービスが一般の人にとって身近になった」ことでビジネスチャンスが広がっていると語る。自分の口座を毎日見ることで、銀行との接点は増えている。

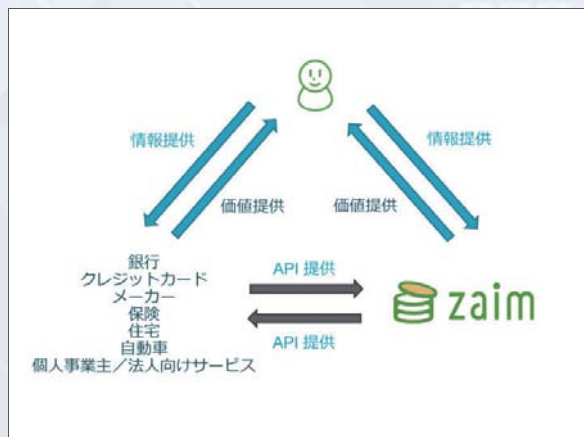


図5 家計簿サービス「Zaim」が生み出す価値連携

ただし、そこでどんなサービスが提供できるかが大事なポイントになる。「一般の人たちは必ずしも金融に興味を持っている人ばかりではありません。金融という境界を越えた結びつきを作っていくべきです」と閑歳氏。市町村の情報なども含めた身近なサービスの機能を今後も拡張させていくという。(図5)



株式会社Zaim  
代表取締役  
閑歳 孝子 氏

## 柔軟な連携によって更新型サービスを実現

銀行とFinTech企業が結びつくことで、確かにメリットは生まれることは想像に難くない。「そうであれば、データをやりとりするためにどんな課題があるのでしょうか」と蓑輪。それをクリアすることで、銀行とFinTech企業の共創は加速するはずだ。

日本IBMで金融機関向けのシステム提案を担当する二上哲也は、「これまでのFinTech企業は銀行データを“参照”することがメインでした。しかし、サービスを高度化するにはデータの“更新”にシフトしていかなければなりません。そこではセキュリティーが大きな課題になってきます」と指摘する。



日本アイ・ピー・エム株式会社  
技術理事  
二上 哲也

共通APIの狙いはセキュリティーを担保しながら、更新型にも対応し、より複雑な接続をシンプルな形で可能にすることにある。蓑輪も「パスワードの設定一つとっても銀行とFinTech企業ではセキュリティーに対する価値観が違う気がします」と語った。

これに対してマクダッド氏は「FinTech企業の多くはスタートアップ企業。リソースが限られます。一番リスクのある所に人もお金も集中させざるを得ない。そこで銀行にはリスクを回避する方法を提案しています。更新の処理を隔離してサンドボックス的に対処したり、少額決済などの権限の階層を分けてリスクを担保するといった方法が考えられるのではないのでしょうか」と話す。

一方、法人向けのサービスを提供しているfreeの尾形氏も「セキュリティーはユーザーにとってどう見えるかが重要です。振り込みなど更新型のサービスでは、それなりの金額が動かし、ユーザーは金融機関レベルのセキュリティーを期待するかもしれない。だからこそ、FinTech企業側ですべて金融機関レベルのセキュリティーへの対応をするのではなく、銀行との分担も考えるべきです。ゼロかイチかという発想ではなく、例えば責任分界点を明確にしたり、ユーザーに対してそれをコミュニケーションすることで担保することが必要。お互いで議論してスタンダードモデルを創っていききたい」と柔軟な連携こそFinTechには必要だと強調した。

閑歳氏は「確かに更新型ではセキュリティーの範囲が違いますが、ここ4、5年で銀行側の意識も変わっていると感じます。ただ気になるのは、更新型を考えた時に、ポイントで支払うなど銀行の決済を通らないやりとりの発生が増えていることです。これはビジネスチャンスでもあります。そこに対して何かしらの対策を考えるべきです」と話す。

二上は「更新系では企業間の信頼が大前提になります。信頼できる企業同士が次のステップに進むのでは」と今後を見通した。

## 新しいサービスの鍵は共通APIの活用にある

銀行とFinTech企業が共創して新しいサービスを生み出すためには、どんなアプローチが求められているのだろうか。

マクダッド氏は「認証形式などに世界的な標準APIを取り入れるのは当然ですが、どこでサービスを差別化していくのかも大事です。上位層で自然に競争することで、利用者が使いやすいサービスが生まれてくるのではないのでしょうか」と話す。あるところまでは共通APIで対応し、細やかなサービスで競争する世界だ。

「まずどういったビジネスを創っていくのかという絵を描くことが大事」だと語るのは尾形氏だ。「APIはあくまでも手段。サービスを一緒に作っていく過程で利用すればいい。ただ、共通APIがあれば開発工数を下げることができるメリットはある。そこで気をつけたいいけないのは、サービスの利便性を落とさないよう、やりとりできる顧客のデータが最大公約数であることが重要です」(尾形氏)

閑歳氏は「どういう価値連携をしていくのか、データをどう活用していくのかという視点からより深く考えるべきです。これまではわかりやすさが最優先でしたが、今はジャンプアップする時期。そのためには、最大公約数的な部分を考える必要があります。各社それぞれが全部違うとFinTechとして立ち行かないところも出てくるのでは」と懸念を示した。

日本IBMが推進する共通APIは最大公約数的な存在である。二上も「まさにそれを目指して頑張っています」と語る。パネルディスカッションに登場した3社は実際に共通APIを試しているが、「仕様としては良くできています」という尾形氏の声に代表されるように、各社とも評価は高い。

果たして共通APIが銀行とFinTech企業の共創を加速する起爆剤となるのだろうか。最後に蓑輪氏が「外部に出せるデータ出せないデータを分けて、優先順位つけて取り組むことになるでしょう」と今後の見通しを語って、パネルディスカッションは終了した。

